

# 共通教育課程における情報リテラシー教育の実践

中 嶋 聞 多

## 1. はじめに

「チャルメラという言葉の語源は?」、「昨年末の世界のインターネット利用人口は?」。クイズ番組の話ではない。いずれも本学の正規の授業のなかで取り上げた課題である。

21世紀に生きる私たちは、グローバル環境の中で圧倒的な情報量にさらされている。しかしその一方で、自らが本当に必要とする情報を求めて広大な情報の森に分け入っていかねばならないことも多い。必要とする情報を効率よく収集し、適切な分析・加工をおこなったうえで、効果的に他者に伝えたり、自らの問題解決に活かす能力は現代人にとって必須のものとなっている。「情報リテラシー」とは本来、このような現代人が備えるべき基礎的能力を指す言葉であるが、これまではあたかもコンピュータの操作能力であるかのような誤解がまかり通ってきた。もちろんコンピュータを使いこなすことも現代人にとって大切な能力であることはいうまでもない。本学においても『情報科学実習』が全学必修科目となったことは記憶に新しいところである。しかしコンピュータはいかに有用であっても道具の一つにすぎない。重要なのはこのような道具を上手に用いて、情報を使いこなすことである。

このような認識のもとに、私の所属する文化情報論コースでは、これまでさまざまな授業カリキュラムを開発し実践してきた。冒頭に述べた授業とは、情報リテラシーのなかでも特に、「学術情報の探索」に力点をおいて、全学の1年生を対象に、平成10年度から3年間にわたって開講した(本年度は休止中)共通教育主題別科目『情報の収集と活用』のことである。この授業は、全国的にも珍しいユニークな特徴をもっており、今後の共通教育のあり方について考えるうえでも示唆に富む内容であると思うので、ここに紙面を借りて紹介することにしたい。

## 2. 授業設計の基本的な考え方

授業は、標題にもあるとおり、共通教育課程で身につけるべき基本的な情報リテラシーの習得という観点で設計されている。ただし、半期15回という制約もあって、内容的には、情報の収集、分析・加工、伝達、活用のすべてのフェーズをカバーすることは到底不可能であり、導入部分にあたる「情報の収集(探索)」に力点をおくことにした。また扱う情報も、1年次生が専門に関わらず興味を持ちそうな「学術情報」に焦点を絞った。

一般に、情報の探索または検索(information retrieval)は、事実探索(fact retrieval)と文献探索(document retrieval)に分けることができる。前者が直接的なリトリヴァル、後者が文献を媒介とした間接的なリトリヴァルというわけである。授業ではこの両方の知識をバランスよく、かつ実践応用可能なスキルとして習得することに目標をおいた。

実はこのような情報の探索法について、専門的な知識を提供できるディンプリンがある。

図書館・情報学である。図書館司書養成課程では従来より、『参考調査法』という科目があり、百科事典や索引誌などの参考図書を用いて情報調査をおこなう方法について教えてきた。それが近年では、電子メディアの普及によって、調査に情報機器を使用するなど大きく様変わりしている。この司書課程での教育を一般学生むけに再編成することで、情報リテラシーを磨く新しいタイプの授業をつくろうと考えたのである。このとき最も重視したのが、附属図書館の協力である。図書館は、この種の授業を展開するために欠かせないリソースを豊富に有するばかりでなく、以前から利用者教育の一環として、図書や雑誌など図書館の所蔵する資料の探し方や使い方についてオリエンテーションをおこなってきた。このノウハウを活用しつつ、事実探索法をも含めた、より高度で体系的な教育をおこなおうとわけである。

このような図書館と連携した情報リテラシー教育には、いくつか先行例がある。たとえば国立大学では、京都大学、岡山大学、新潟大学、金沢大学等で実施されている。とくに京都大学でおこなわれている全学共通科目『情報探索入門』のテキストは、総長自ら執筆と監修をおこない、平成11年3月に出版され、話題をよんだ（長尾1999）。今回、本学での授業を設計するにあたって、いくつかの事例について詳細に検討したが、いずれも満足のゆくものではなかった。もっとも問題であると感じたのは、情報機器の利用に重点を置きすぎ、情報探索本来の記述が不十分であること、とくに事実検索において、基本となる印刷資料の利用についてほとんど記載のないことであった。たしかに今日、ITの進展はめざましく、図書館資料もまた紙媒体から電子メディアへと大きく変化しつつある。しかし現在はまだ、こうした変化の過渡期であることも心にとめるべきである。電子メディアによってしか得られない情報がある反面、電子メディアでは得ることのできない情報もまた多数存在するのである。現時点でわれわれが身につけるべき情報探索のスキルは、媒体をとわず情報にアクセスできるものでなければならない。

### 3. これまでの経緯

授業の準備は平成9年の秋ごろからはじめた。とくに図書館の組織的な協力を得るために、人文学部長からも協力要請をおこなっていただき、図書館および事務局での数度にわたる検討を経て、具体的な協力方法が定まった。このとき特に難しかったのが、事務官（図書館司書の身分）による正規授業支援の範囲の特定であったと記憶している。

平成10年度の授業は、すでに実施されていた情報科学演習との違いを強調するために『文献の収集と活用』という題目で開講することにした。そしてカリキュラムには、「情報リテラシー教育を基幹科目として位置づけ、図書館の組織的な協力体制のもとに、学生が卒業研究や卒業論文執筆に際して必要となる基本的な知識を身につけるとともに、実社会において役に立つ実践的な知識の修得をめざす」ことを目的とすることを明記した。

授業は、講義、解説、演習の3つの柱で構成された。講義は、自然・社会・人文科学それぞれの学術情報の生産と流通プロセスについて概観するものであり、私が担当した。解説は、主として本学図書館の資料ならびに本学蔵書検索システム OPAC やその他各種データベース等の情報検索システムの利用方法についての説明であり、図書館の方をお願いした。そして演習では、数人のグループに別れ、実践的な課題に対し、先に解説された資料や検索システムを活用して文献調査を行う内容で、私と中央図書館の職員7名が協力しながら実施した。

平成11年度は、前年度とは形式を一新して授業をおこなった。前年度、学生の授業評価は良好であったものの、図書館職員に過剰な負担を強いたとの反省から、実習をなくし、講義を中心にすえたのである。図書館には授業で出題される宿題に対するレファレンスをお願いした。図書館の担当者は、宿題の解答を得るために必要な参考資料の所蔵などをあらかじめ確認しておき、テキストの形式でデータベース化し、カウンターでのレファレンスをスムーズにおこなえるよう準備を整えた。

平成12年度は、ふたたび平成10年度に近い形で授業をおこなった。図書館職員のほかに新たに研究室の大学院生3名がT.A.として参加することが可能となったためである。図書館は単に実習に協力するだけでなく、宿題づくりやカウンターでのレファレンス、解答の確認等でも協力し、より深く授業にコミットするようになった。またこれまでの授業支援は附属図書館のなかでも中央図書館の職員のみに関わりであったが、12年度は附属図書館のレファレンス担当職員研修の一環として各地に分散している分館の職員も参加し、支援をおこなった点がこれまでとは異なっている。

#### 4. 平成12年度の授業内容

平成12年度の授業内容をシラバス等からひろうと以下のとおりである。

◎授業題目：情報の収集と活用（この年、題目名を「文献の…」から変更）

◎開講期：前期

◎曜日・時限：水曜5時限

◎対象学生：全学部1年生

◎受講学生：62名（人文学部，経済学部，教育学部，理学部，工学部，農学部，繊維学部）

\*この年度のみ医学部学生は0

◎授業のねらい

全国的にあまり例のない本格的な文献情報の利用教育を、情報処理演習とならぶ情報リテラシー教育の重要科目として位置づけ、図書館の組織的な協力体制のもとに実施する。理科系・文科系を問わずに、ひろく卒業研究や卒業執筆に際して必要となる基本的な知識を身につけるとともに、実社会において役に立つ実践的な知識の習得をめざす。

◎参考書

藤田 1997

大串 1997

情報探索ガイドブック編集委員会 1995

長澤雅男 1994

木下是雄 1990

◎授業担当

・講義 授業担当教官

・実習 授業担当教官，大学院生3名

中央図書館職員3名，各分館から毎回1名

◎授業日程

4月12日	オリエンテーション
4月19日	図書館の資料と利用方法についての拡大ガイダンス
4月26日	講義
5月10日～7月19日	実習
7月26日	まとめと試験

#### ◎実習のスケジュール (表1)

実習にもちいる資料等は、長澤(1994)に紹介されたもので、本学図書館で利用可能な参考図書およびデータベースの中から選んだ。

#### ◎実習の内容

##### ①例題および宿題の作成

各参考資料の特徴を把握しやすく、かつあまり複雑ではない例題作成を心がけた。出題した宿題は例えば情報源に『国史大辞典』を想定したものとして、「渡辺華山が田原藩(三河国田原)で『格高制』を導入したが、その読みと制度の概要を調べよ」といったもの。

##### ②参考資料の概要を紹介する資料の作成

長澤(1994)等を参考にしながら配布資料を作成した。

##### ③実習

参考資料の説明においては、まず二人一組の説明テーブルを4箇所設置し、受講生を17～18名の4グループ(A～D)に分けた。受講生はグループ毎に時間を区切って各参考資料の準備されたテーブルを回ることによって、ひとつおりの資料(現物)の説明を受けられるように工夫した。説明者側は4回説明することになる。関係者の間ではこれを『出店方式』と称している。

また6月28日からのデータベースの説明では、実習において受講生ができるだけ実際にデータベースを使用できるように心がけた。

##### ④宿題に対しての中央図書館カウンターでのレファレンス

解答を得るまでのプロセスや資料の使用方法に関する質問、資料の配架場所等の質問に答えることにし、直接解答につながるようなレファレンスは控えた。

##### ⑤宿題の確認

受講生には宿題の調査結果を「情報調査票」に記入し提出させた。「情報調査票」の記入項目は以下の通りである。

- 学籍番号、氏名
- 調査日
- 調査項目(宿題の内容)
- 調査結果(解答)
- 情報源(解答を得るために使用した資料名)
- 調査プロセス(解答を得るまでのプロセス)

とり上げた資料の使用方法が理解できているかに焦点をしばり、宿題の解答の確認をおこなった。

## 5. 学生による評価

表1 実習のスケジュール

日程	テーマ	実習資料等
5月10日	参考図書・データベース情報の探索	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本の参考図書解説総覧</li> <li>Guide to reference books</li> <li>Walford's guide to reference material</li> <li>書誌年鑑</li> </ul>
5月17日	言語・文学情報の探索	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本国語大事典</li> <li>大漢和辞典</li> <li>Oxford English dictionary</li> <li>Webster' third new international dictionary of the English language</li> <li>聖書語句大辞典</li> </ul>
5月24日	事物・事象情報の探索	<ul style="list-style-type: none"> <li>世界大百科事典</li> <li>日本大百科全書</li> <li>New encyclopedia Britannica</li> <li>Encyclopedia Americana</li> <li>新教育学大事典</li> <li>世界科学大事典</li> </ul>
5月31日	歴史・日時情報の探索	<ul style="list-style-type: none"> <li>国史大辞典</li> <li>MARUZEN 科学年表</li> <li>朝日年鑑</li> <li>World almanac &amp; book of facts</li> </ul>
6月7日	地理・地名情報の探索	<ul style="list-style-type: none"> <li>長野県百科事典</li> <li>現代日本地名よみかた大辞典</li> <li>世界地名大辞典</li> <li>角川日本地名大辞典</li> </ul>
6月21日	人物・団体情報の探索	<ul style="list-style-type: none"> <li>世界伝記大事典</li> <li>岩波西洋人名辞典</li> <li>人物レファレンス事典</li> <li>東洋人物レファレンス事典</li> <li>World of learning</li> </ul>
6月28日	図書情報の探索	<ul style="list-style-type: none"> <li>OPAC</li> <li>NACSIS-Webcat</li> <li>TRC 新刊書籍検索, 新刊案内 (* 1)</li> </ul>
7月5日	雑誌情報の探索(1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>雑誌記事索引</li> <li>SwetScan (* 2)</li> </ul>
7月12日	雑誌情報の探索(2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>NACSIS-IR (* 3)</li> </ul>
7月19日	新聞・インターネット情報の探索 (* 4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>信濃毎日新聞データベース</li> <li>Yahoo Japan, goo</li> </ul>

- (\* 1) OPACとは本学蔵書目録データベース検索システム, NACSIS-Webcatは全国の大学図書館等の所蔵する資料の総合目録データベース, TRCは(株)図書館流通センターのこと。
- (\* 2) 雑誌記事索引とSwetScanは信州大学附属図書館で提供しているCD-ROMデータベース検索システムで利用できるデータベースである。これは学内向けのサービスで無料。
- (\* 3) NACSIS-IRは有料のデータベースであるが, 国立情報学研究所に無料パスワードの発行を依頼し, 協力を得ることができた。
- (\* 4) 7/12, 19のパソコンを使用した実習は, 受講生全員分のパソコンを確保できる総合情報処理センターで実習がおこなわれた。

7月26日のテスト終了後、アンケート用紙を配布し記入してもらった。回収できたのは、受講生62名中60名分であった。

アンケートの集計結果は表2の通りである。

「この授業で学んだことは今後の学習・研究に役立つか」との問いに対して、「大いに役に立つ」が33、「多少役に立つ」が26、「どちらとも言えない」が1、「あまり役に立たない」「役に立たない」は0であった。また「図書館の印象について」は、授業を受講する前は受講生の半数以上が「図書館は学習に役立つところとは思っていなかった」と「どちらとも言えない」と感じていたのに対し、受講後は「図書館は学習に役立つところだと思う」が57という結果になった。

このほか感想を自由に記入してもらったので、代表的なものをいくつか紹介する。

#### ●授業について

- ・受講した授業の中で一番やりがいがあった。
- ・図書館で宝さがしゲームみたいな感じで、とても役に立つ楽しい授業でした。
- ・一方的な講義でなく、実習みたいな感じが多かったので、より理解できたと思う。
- ・実際にほかの授業でレポートが出された時に役に立ちました。
- ・もう少しゆっくり授業で練習問題や説明を受けたかった。

#### ●実習について

- ・実習をやった方がわかりやすいと思う。
- ・実習では説明時間が限られているため、わかりづらいこともあったが、宿題があったので、授業でどこがわからなかったのか確認できたし時間をかけて調べることで理解が深まった。
- ・授業が少ししいそがしかった。もう少し例題をたくさんできたらよかった。
- ・コンピュータを使う実習が大変だった。又、図書館のコンピュータはなかなかあかないので宿題が大変でした。
- ・パソコンの実習をもう少しやりたかったです。

#### ●図書館の利用について

- ・こんなに図書館に行くことが多くなるなんて驚きです。
- ・いままで図書館を勉強のために使ったことはなかったが、この授業を通して正しい使い方がわかった。
- ・この授業を受ける前までは、大学生活の中で図書館を利用することはあまりないだろうと思っていたが、この授業を通じて図書館の重要性を認識し、大いに活用していきたいと思うようになった。

## 6. 今後の課題

これまで3回にわたる授業の実施経験から、以下のような課題が浮かび上がった。

### 1) レファレンス・ツールの充実

図書館に十分な参考資料が揃っていない。これは過去3回の授業共通の反省点のひとつである。学生の感想にもあるが、受講生全員が同じ課題に取り組むため、宿題の提出期限まで

表2 アンケートの結果 N=60

(1) 所属学部

人文学部	9
経済学部	2
教育学部	14
理学部	5
工学部	21
農学部	4
繊維学部	5

(2) 実習内容

1) 説明

分かりやすかった	39
分かりにくかった	2
どちらとも言えない	19

2) 実習

分かりやすかった	35
分かりにくかった	9
どちらとも言えない	16

3) 実習資料

使い方が良く理解できた	39
使い方があまり理解できなかった	7
どちらとも言えない	14

4) 配布資料

役にたった	42
役にたたなかった	5
どちらとも言えない	12

5) この授業で学んだことは  
今後の学習・研究に役立つか

大いに役立つ	33
多少役立つ	26
どちらとも言えない	1
あまり役立たない	0
役立たない	0

(3) 図書館の印象について

1) 授業を受ける前

図書館は学習に役立つところだと思っていた	25
図書館は学習に役立つところとは思っていなかった	15
どちらとも分らなかった	19

2) 授業を受けた後

図書館は学習に役立つところだと思う	57
図書館は学習に役立つところとは思えない	0
どちらとも分からない	3

に資料を調べることができないという状況があった。

附属図書館では現在、参考資料の充実を図るため、先に紹介した長澤（1994）に紹介されている参考資料について、本学での所蔵状況のチェックをおこない、未所蔵のものについて整備を進めている。

またこれまで、中央図書館の参考図書の配架場所が2箇所に分散し、利用しにくいことが以前から問題とされてきた。附属図書館ではこうした反省をもとに、カウンターまわりの資料の配架について一新した。

## 2) 教科書の作成

3回の授業は、いずれも配布資料をもとにおこなってきた。資料は長澤（1994）を基本としてきたが、少々版が古いのが難点である。やはりそれぞれの授業場所にあった、最新のテキストが必要であると痛感した。

## 3) レファレンス事例データベースの構築

宿題に対するレファレンスではじめた事例データベースづくりを本格化させ、附属図書館の各館における文献所在調査、事項調査、利用指導等のレファレンスの事例をデータベース化し、学内で共有化をはかろうというものである。こうしたデータベースの先進事例としては、九州地区国立大学図書館協議会が中心となって試験運用中の「レファレンス事例 DB システム」(<http://web.lib.kumamoto-u.ac.jp/ref/>)がある。

これらの課題は、昨年度策定された『信州大学附属図書館のあり方：ネットワーク型図書館の構築』でも取り上げられ、附属図書館にとっても重要な課題と位置づけられている。

## 7. 次年度にむけての取り組み

平成10年度から3年間続けてきた『情報（文献）の収集と活用』は、さまざまな問題を抱えつつも一定の成果をあげたと考えている。なによりも学生のニーズに確かな手ごたえを感じたことがわれわれにとって最大の励みとなった。今年度は充電期間とし、学長裁量経費等により参考図書の充実をはかるなど、次のステップへむけて準備をすすめている。

昨年11月、本学や県下の大学・短期大学の図書館職員有志の方々と情報リタラシーに関するささやかな研究会を発足させた。研究会の目標は、上記授業のためのテキストを作成することである。本来、大学における情報リタラシーに関するテキストは、情報学領域の研究室と図書館が協力して作成するのが一番望ましいと考えている。理論的な記述は前者でできるが、探索に使用する情報リソースに関する部分は日々新しくなるために、内容の更新を頻繁にかつ組織的におこなう必要があるからである。しかもこうした授業は、本学だけでなくどこでも必要とするものであるから、複数の大学が協力してつくればよいと考え、他大学にも研究会への参加を呼びかけた。研究会では当面、学生を対象にした授業のテキスト作成を目標とするが、将来は、市民の生涯学習も視野に入れていきたいと考えている。

このように少しずつ準備をすすめながら、平成14年度後期に『情報の収集と活用』を再開する予定である。関係各方面のご協力をぜひとも賜りたいと願う次第である。

## 参考文献

藤田節子 1997 自分でできる情報検索筑摩書房



- 情報探索ガイドブック編集委員会 1995 情報探索ガイドブック 勁草書房  
木下是雄 1990 レポートの組立て方 筑摩書房  
長尾真（監修）川崎良孝（編）1999 大学生と「情報の活用」 京都大学図書館情報学研究会  
長澤雅男 1994 情報と文献の探索 第3版 丸善  
大串夏身 1997 インターネット時代の情報探索術 青弓社

## 謝辞

附属図書館の犬浦恭子氏は、平成12年10月27日、長野県図書館大会において「信州大学における情報リテラシー教育支援の試み」と題する発表をおこない、ひろく図書館の方々に本授業について紹介して下さった。それが図書館サイドからの授業紹介であるとするれば、この授業の共通教育としての意義についてもどこかでまとめておく必要性を感じた。本稿をまとめるあたり、犬浦氏には資料の提供などたいへんお世話になった。ここに記して感謝申し上げる。